
ブレイバーズセブンー僕と7人の勇者達ー

葉之蔵隆造

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブレイバースセブンー僕と7人の勇者達ー

【Nコード】

N2109Y

【作者名】

葉之蔵隆造

【あらすじ】

西暦2370年。

新しいエネルギーを発見した人類が飛躍的な進歩を遂げ始めた時代。一人の少年が偶然にも【異界の門】^{ゲート}を開いた事で世界（次元）は大きく変化を遂げていく。少年は7人の勇者と呼ばれる超人達と共に世界（次元）の破滅を食い止めるべく、困難の道へと旅立ったのである。その行く手に待ち受ける様々な苦難を勇者達と乗り越え、正義、悪、友情、愛と様々な経験をつみ成長していく少年は、その先に何を思い何を成すのか。

*キーワードは話が進むにつれて増えていきます。

出会い

西暦2370年。

人類は殆ど枯渇した化石エネルギーや、開発や発展はしているものの、一向に総量の少なさを改善できない太陽エネルギー等の既存エネルギーに代わる新エネルギー【高次元流動粒子^{ハイディメストフロー}】を発見した。

発見者は世界有数の数学者であり、また有名なSF作家であったハルト・ハミルトン博士だ。

偶然発見したこの粒子は、様々な分野の技術を飛躍的に発展させていった。

そうして20世紀初頭から停滞しがちだった人類の科学の発展は、飛躍的な進歩を遂げていった。

本来そういった急激な変化に混乱は付き物だが、不思議と世界は当初心配された混乱も殆ど無く、人類はその新エネルギーを活用した宇宙開発にまで着手し始めていた。

そんな時代に、一人の少年が偶然にも多次元への扉を開いてしまう。

開かれた扉は【異界の門^{ゲート}】と呼ばれ、不安定だが他の次元への干渉が出来る代物だった。

各国はこぞって調査チームを送り込んだが、どのチームも帰っては来なかった。

その事実に分達の思慮の無さを痛感した各国は徹底的な調査、研究の後にゲートを利用する方針を立てたのである。

ゲートは日本の富士の樹海奥地にある。

その為一般人が立ち入る事は無く、また軍による徹底的な閉鎖もあって一般的には大きな混乱は無かった。

しかし百名近い調査チームが行方不明なのもあって、危険と判断さ

れたゲートは外からの調査、研究が済むまではゲートの中に入るのを禁止とされた。

そしてゲートはその存在を国連預かりとし、管理を日本政府に一任する形で取り敢えずの収束を図る。

その後各国はそれぞれ選りすぐりの科学者達を集めて研究チームを作り、ゲートの研究をさせる為に日本へと派遣した。

日本政府は自国にあるために管理の任命国とされた為、莫大な資金を使ってそのゲートがある場所を中心に、半径5kmにも及ぶドーム型の施設を作った。

そうして出来た研究施設で、各国の研究チームはそれぞれ独自の理論でゲートとそのゲートを開いた少年を研究していったのである。

——ゲートと少年の研究が行われ始めてから半年後

施設のとある部屋に、ゲートを開けた少年が透明のカプセルに入った状態で寝かされていた。

部屋の中はカプセル以外何も無く、天井床壁全て白で覆われている。ただその中で壁の一面だけが分厚い強化ガラスがはめ込まれていた。その強化ガラスの向こうに、白衣を着た金髪をオールバックにしてメガネをかけた無精髭の男が一人と、その助手であろう女性と男性が慌しくパソコン機器の操作をしている。

「サマンサ、勇気君の睡眠状態はどんな感じだ？夢は見ているか？」

金髪無精髭の男は着ている白衣を脱いで椅子に無造作に投げかけると、椅子に腰掛けコンピュータを操作しているサマンサと呼ばれた

女性の後ろから自身もパネルを覗き込む。

「いえ、まだですね。今までの実験全てレム睡眠に入って5分で夢を見始めましたので、今回も5分だと思います。ですから後1分ですね」

勇気と呼ばれた少年は、ゲートを開けた半年後から不思議な夢を見る様になった。

その夢は様々であったが、どれも不思議な世界の物ばかりだった。まあ、夢なのだから。と言ってしまえば見も蓋も無いのだが、普通の人が見る夢より遥かに生々しく、そして何よりリアリティがあった。

今まで色々な検査を強制的にさせられてきた勇気だったが、身体的にも精神的にも何の異常も見当たらなかった。

だが最近その夢を見出した勇気からは、異常なハルト粒子の放出が確認されたのである。

ハルト粒子とは【ハイデイメストフロー高次元流動粒子】の流動していない粒子の別名であり、由来はハルト博士から取っている。

実はハルト粒子は人類がその存在に気が付かずにいただけで、自然界に何処にでも存在しているといった物だった。

ただ、その量はどんな状態でも1?に1000hn(1000ハルト)と決まっており、それを越す容量は自然界には存在していない。だが、今夢を見ている勇気少年から放出されている粒子量は1?に1億hn。

異常を通り越した常軌を逸したとんでもない数値である。

ハルト粒子の研究をしているある科学者がこんな推測を立てた事がある。

何故ハルト粒子は1?に1000hnと決まっているのか?それは

その数値を越す粒子量が次元崩壊を促すのではないか？という説である。

勿論これは唯の推測であり、根拠も何も無い。

実験を試みた学者も居たが、現状出来うるあらゆる手段を用いても、1?に1000hnを越すハルト粒子を収める事はできないでいた。その為、ハルト粒子の量は普遍的定数の理論として研究されてきたのである。

殆ど定説となり始めた矢先の勇氣少年の現象は、富士樹海ドームと名付けられた研究施設全体に激震を走らせた。

粒子を放出する人間なんて常軌を逸した現象に、いや人間だからと言う訳ではない。

ハルト粒子は地球上どの物質からも放出現象等は観測されていなかったのだ。

その発見と驚きと歓喜は、研究者をマッドサイエンティスト化させるには十分な理由であった。

ゲートを開けた勇氣は、今まで保護と言う名目の上に多少人権を無視した実験が行われてきた。

身体的な苦痛を伴う実験、精神的な負荷を掛けられた実験等、薬を使われる実験も結構頻繁に行われてきた。

だが、見始めた夢の内容を報告し、その夢を見ている最中の検査をしてからは勇氣の人権は完全に無視された実験へと変っていった。今回の実験でも睡眠ガスを使われて強制的に眠らされている。

しかも、度重なる実験でガスに耐性が付いてしまった為、常人なら致死量を超える濃度のガスが使われている。

唯寝て夢を見る。

それだけの実験だとは思わないで欲しい。

食事を一切口にさせずに何日も強制的にガスで眠らされ続ける。

5日間薬で寝させない様にしてから、薬で強制的に長時間寝されら

れる。

肉体的、精神的苦痛によってギリギリまで身体と心を追い込まれてからガスで強制的に眠らされる。

とても知識を追求する人格者と呼ばれる学者がする実験とは思えないような実験が日々繰り返されたのである。

だが、勇氣はどんな不当な実験にも黙って従い、実験に対して非協力な態度は見せていなかった。

その理由は『家族』。

両親を幼い頃事故で亡くした勇氣には三歳年下の妹が居た。

勇氣が今年で17歳、妹優希は今年で14歳、両親が死んでから10年。

施設に預けられた二人の兄妹は、肩を寄せ合って生きてきたのである。

彼女は今もこの施設の何処かで勇氣は人類にとって大切な研究を手伝ってる。

と言う事を信じて兄を誇りに思い生活しているらしい。

勇氣はそんな妹を人質に取られていたのである。

その為どんなに過酷な実験にも文句一つ言わずに、勇氣は唯々耐えていた。

「シュトラウゼン博士、勇氣君が夢を見始めた模様です」

サマンサはディスプレイに表示されたハルト粒子の増加を確認すると、金髪無精髭の男、シュトラウゼンと呼んだ男に報告する。

「ふむ、上昇値は今までと変わらずか・・・あいも変わらず人類に逆らい続ける粒子だな」

サマンサと同じくディスプレイを覗き込んだシュトラウゼン博士は、今までのデータと比較しながら別のコンピュータのキーボードキーを指で叩く。

ハルト粒子は1?に1000hnしか存在を許されない。

しかし、今勇気の寝ているカプセル内は1000hnを大きく超える粒子量が確認されている。

確認されているにも関わらず、何も起こらない。

何も起こらなければ、粒子の上限は1000hnではないはずだ。

だが人類は、粒子を捕まえる事ができるのに、それを動かす事も出来るのに、1?内に限ってでしか流動させる事しか出来ないでいた。それが当たり前だと思われていた今迄とは違う現象を確認しているにも関わらず、その現象を自由に出来ない事がシュトラウゼンには歯がゆかった。

(この現象の謎を解き明かせば私は・・・)

「ジャック、勇気君に予定通りの電圧で電流を流してくれ」

シュトラウゼンはパソコンへの入力を一時中断すると、ジャックと呼んだ助手に指示を出して強化ガラスの前に移動しカプセルを見た。

「はい・・・ですが本当に良いのですか博士？この電圧、下手をすると即死しかねない電圧ですが・・・」

配電盤の前にあるコンピュータ画面の実行ボタンにカーソルを合わせたままで、マウスのボタンを押すのを躊躇しているジャックがシュトラウゼンに確認する。

「かまわんよ、彼には身体強化の薬を投与済みだ。よしんば死んでも強化心筋剤を投与してから再度の電気ショックによる蘇生は可能だ」

冷たい口調でシュトラウゼンはジャックに背を向けたままで言った。

「しかしそれでは身体に後遺症が残るのでは？」

「夢が見ればそれで構わん。早くやれ」

そう言うと、少し苛立った口調でジャックに言い放つ。

「は、はい」

少し焦った様にジャックはモニターの実行ボタンをクリックした。カプセル内の勇気の身体がビクンビクンと上下に波打つ。

「サマンサ、どうだ？何か変化はあるか？」

勇気の身体の撥ね（・・・）を見たシュトラウゼンがサマンサの方を向いて、状態の確認を促す。

「変化、ありました！凄い勢いでハルト粒子の量が増加しています
50000、1000000、10000000、10000000、10000000
00超えました！凄い、まだ上昇している・・・」

サマンサが興奮した口調で報告すると、シュトラウゼンは急いでサマンサの席まで駆け寄った。

「よし！よし！粒子量が上昇した事による空間の変化は見られるか？」

シュトラウゼンは何時もの冷静な顔を歓喜に歪ませてサマンサの顔のすぐ横まで顔を近づける。

「空間への干渉は、見られません。ですが数値はいまだ上昇中です。既に十億h nを超えました」

パソコンのモニターに表示されているハルト粒子量を示すバーは殆どMAXを示していたが、隣にある数字だけは目まぐるしく数字を大きくしていた。

「くそ！これだけの粒子量でなんで変化が現れん！？ジャック！電圧をもっと上げろ！」

興奮に歪んだ顔をしたシュトラウゼンはジャックに怒鳴るように指示を出す。

「はっはい！」

その迫力に押され焦ったジャックは一気に電圧をMAXまで上げてしまった。

カプセルからはバリバリと雷の様な音を立てた放電現象が起こった。流石にその放電現象を見てシュトラウゼンは焦った、あの放電量だと勇気が消炭になってしまう。

「このっ馬鹿！！実験体を消し炭にする気が貴様！！早く電流を止めろ！！！」

「はっはい！」

「サマンサ！すぐに医療班を呼んでくれ、大至急だ！」

「わかりました！」

すぐさま電流をカットしたジャックを殴り飛ばすと、シュトラウゼンはサマンサに指示を出して観測室から黒い煙が立ち昇るカプセルが置かれている部屋へと移動する。

シュトラウゼンが部屋を出ると同時にサマンサは席を立ち、すぐさま館内連絡用パネルへと移動して医療班へとコンタクトを取った。

席を立ったサマンサの後ろでは、パソコンモニターにハルト粒子の空間流動が行われている表示が出ていた。

「博士！被検体の状態はわかりますか？」

シュトラウゼンがカプセルの中を見て呆然と立ち尽くしている所に、サマンサから緊急要請を受けた救急隊が駆けつけてきた。

救急隊の一人がカプセル内を覗くと、そこには黒焦げた人型の物体が横たわっているのが見て取れる。

これは最早手遅れだと思ったが、救急隊員は自分の職務を全うしようとかプセルを開ける。

モワッツと人体の焼ける嫌な匂いと、熱を持った黒い煙が部屋を充填していく。

救急隊の、恐らくは新人なのだろう一人がその匂いに当てられて思わず嘔吐した。

「これではもう、無理ですね・・・」

匂いの中でも呆然としているシュトラウゼンに、救急隊隊長が一応

報告をする。

「・・・流動反応があるのか？」

悲痛な面持ちの救急隊隊長を無視して、呆然としていたシュトラウゼンは自身の腕に装着されている腕輪型携帯端末の反応に我を取り戻す。

勇気の黒焦げの身体から出ている反応はハルト粒子の流動反応だった。

部屋中にある観測室直通の通信パネルに向かって駆け寄ると、サマンサを呼び出すコールボタンを叩く。

「サマンサ！勇気君のハルト粒子の状態はどうなってる？」

「えっ？あの・・・」

「すぐに確認しろ！」

「はっはい」

いきなりの通信に少し狼狽気味なサマンサだったが、すぐにパソコンモニターを確認すると、驚愕の表情を浮かべてすぐさま避難警報のボタンを押した。

「博士！ハルト粒子が流動を開始しています！しかもこの流動波形は超次元歪曲値を複数重ねる方向に・・・いけない！早く逃げて下さい！！！」

サマンサは全部説明する前に悲鳴を上げる様に避難を呼びかける。

超次元歪曲重複反応。

それはハルト粒子が流動し、核分裂反応に匹敵するエネルギーを出す前兆だった。

本来発電炉の中で行われる反応が、今むき出しで起ころうとしている

る。

そんな事に成れば、ドーム全体とは行かないまでも、少なくとも勇氣から半径300mは一瞬で蒸発してしまう。

しかも今のハルト粒子量は通常の百万倍だ。

どれほどの被害が出るのか予測がつかない。

しかし、シュトラウゼンは何故かその場を動こうとしなかった。

彼には、恐らくサマンサが思うような事にはならないと直感めいた感覚を確信していたのである。

「超次元歪曲値が重なる？フフ・フハハハ！やったぞ！遂にやったぞ！次元が重なり、新たなゲートが開く！これで私の理論が・・」

シュトラウゼンがそこまで言った時に、カプセルを中心に白と黒の光の渦が部屋全体を覆い尽くした。

《あれ？ここは？さっきまで夢を見ていたのに・・・》

勇氣は今まで見ていた中世の世界の人々の営みが、急にかき消されて困惑していた。

夢から目覚めるにしては急すぎる。

何時もなら薄ボンヤリしていつてから、徐々にフェードアウトするはず、こんなに一気に切り替わったのは初めてだった。

しかも目覚めもしない。

《僕、どうしちゃったのかな？実験が上手くいかなかったのかな？》

夢から覚めるのだろうか？という不安が胸を過るが、不思議と恐怖は感じてはいなかった。

真っ白な空間に放り出された様な感覚、宙に浮いている様な感覚が徐々に無くなり、何時の間にかしつかりと地に足が着いた感覚が足裏に伝わると、目の前に人影がジワリと姿を現し始めた。

《誰？》

勇気はだんだん人影が増えていく様をジッと観察していくと、7体の影が現れた時、何故か唐突に理解した。

《そうか、僕死んじゃったんだね》

7体の人影はゆっくりと勇気に重なり出すと、勇気の頭の中に言葉にならない感覚が広がり、また唐突に理解した。

《うん、解った。僕は死んだけど生きてるんだね。これから何をすればいいかも解った》

最後の一人の影が重なると、勇気の身体が発光を始める。

《僕はあの施設を脱出して、妹を、優希を助け出す。皆協力して下さい。そして貴方達の世界と一緒に救いましょう》

発光しながらニコリ笑う勇気の思念に、恐らく影の一人であろう別の思念が語りかけてきた。

《よう！俺はゼクス。ゼクス・マクドガナルってんだ！ファーマーストって世界で勇者をやってる。属性は剣。まずは俺でいいか？》

ゼクスと言う青年が勇氣に語りかけると、勇氣の意識にゼクスの姿が浮かび上がった。

ゼクスは高い身長に無駄の無い筋肉で覆われた身体つきをしていた。身体の彼方此方に動きを阻害しない程度の黒い鎧を着込んでいる。銀髪の髪はボサボサ気味だが、それが上手く纏まってワイルドなフアッションと言えなくも無い。

肩に担いだ大剣は無骨だが、何処と無く神々しい輝きを放っていた。その光に照られて顔が露になると、そこには想像していた通りのワイルドな風貌が現れた。

《うん。僕は佐支神勇氣さしがみゆうきって言います。ゼクスさんよろしく願いします》

その返答を聞くと、ゼクスの口の端が不敵な笑みを浮かべる。

《よし勇氣！俺と共に暴れまわろうぜ！》

《うん！》

白と黒の奔流が勇氣を包み込むと、勇氣の姿がゼクスへと変った。

《へへ・・・じゃいつちよ行きますかあ》

ゼクスは奔流を続ける白黒の輝きに包まれると、その場所から姿を消していった。

サマンサは後に今から起きる事を、自らの手記の最後にこう記している。

【私達は、自らの欲望を追い求め、神の摂理に逆らった。その為にとんでもない化け物を生み出してしまったのです。私達は理解しなければならぬ。人間は決して全能などを追い求めていけない。私達は他の生物と同じ愚かで矮小な存在なのだと言う事を心に刻み込んで謙虚に生きなければならない。それが人類のもっとも繁栄する一番の近道なのです】と・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2109y/>

ブレイバースセブナー僕と7人の勇者達ー

2011年11月4日14時06分発行